

黒い車

ぼくはパーキングエリアの車の中にいた。

小早川先輩と、その友達の秋吉さんと溝口さんも一緒だ。京都旅行の途中だった。このパーキングエリアに着くまで、ぼくは後ろの席で眠りについていたのだが、クルマとクルマとが擦れるときに鳴るような、いやな金属音に目を覚ました。それは、溝口さんの運転していたクルマが隣に駐車中のクルマに擦った音だった。

擦ってしまったクルマの運転手が帰ってくるのを、いま待っている。

おれはパーキングエリアのクルマの中にいた。

秋吉さんと小早川と、その後輩の石渡くんも一緒だ。ペーパードライバーで久しぶりの運転、徹夜でのクルマ移動という悪条件もあって、駐車をする際に、隣の黒いクルマに擦ってしまった。擦ってしまったクルマの運転手を待とう、と秋吉くんは言ったが、おれはこのまま、逃げてしまってもいいのではないか、そう思っていた。

旅行は、はじまったばかりだ。

おれはパーキングエリアのクルマの中にいた。

みつちよんと小早川と、その後輩の石渡くんも一緒だ。みつちよんが隣のクルマに擦る、その直前、おれは助手席にいて、みつちよん当たる当たる、と叫んだ。しかしみつちよんは、それに対して、アクセルを踏むという作業で答えた。

このまま無視して逃げるといふ選択肢もなくはないが、丁度、朝食どきで大勢の人間に目撃されてしまっている以上、運転手を待って、ただ謝ることしかできないだろう。

おれはパーキングエリアのクルマの中にいた。

秋吉とみつちよん、後輩の石渡も一緒だ。おれは後ろの席で寝ていたので詳しくは分からないが、みつちよんが運転をしていて、クルマを止めようとした時に、隣のクルマに擦ってしまったようだった。そのクルマに人が乗っていなかったことが、不幸中の幸いだ。おれが免許を取らない理由は、こういう事故が起きる可能性があるからだ。

運転手が、やくざとかだったら、めんどくさい。

わたしはパーキングエリアで朝食をとっていた。

愛人二人と中里さんも一緒に、これから山に向かう。朝食はバイキング形式になっていて、腹が減っていなかったにも関わらず、つい、いっぱい食べてしまった。中里さんが、味海苔を山ほど食べていたので、わたしが、そんなに食べても髪の毛は増えませんが、というと、味海苔が好きなんだよ、と笑っていたが、それ以降、まったく味海苔を食べていなかったのが可笑しかった。

愛人二人は大笑いしていた。

このあと、山奥で殺されることは当然知らないのだろう。あの黒いクルマのトランクに、スコップを二本積んでいることすら知らないのだろう。

窓から差す朝陽が、食べ残された味海苔と中里さんの禿げ上がった頭を照らしている。それは奇妙なほど美しい反射光となって、わたしを優しい気持ちにさせた。

ぼくはパーキングエリアのクルマの中にいる。

小早川先輩と、その友達の秋吉さんと溝口さんも一緒だ。となりのクルマの運転手は、朝食中なのか、まだ現れない。

腹へったな、と先輩がひとりごとのように呟いた。

昨日の夜、一回目のパーキングエリアでたこ焼きを食べたきり、何も口にしていないことを思い出したら、妙にお腹がすいてきた。

運転手がまだ現れないクルマ。

ぼくは、その黒いクルマが朝陽に照らされているのを見て、なぜか、味海苔を思い出していた。旅館の朝食なんかでよく出てくる、無かったら無いで構わない、そういった、あの味つけ海苔だ。

味海苔を包装するビニールを開封する時、ちょっと注意深く切らないと、海苔の部分までいっぺんにもぎ取ってしまうことがある。クルマの事故というのも、おそらく、そんなものなのかもしれない。

このあと、運転手に謝ってから、もし朝食を食べる時間があるなら、味海苔を食べよう、そう思った。